

文の配列からみた日英の差異 ―天声人語と英文訳の比較―

長坂水晶

(1993.6.19 発表)

I. はじめに

文章の筋立てや思考の組立て方は言語や文化によって異なる、とKaplan(1966)は指摘している。牧野(1978)や西原(1990)によると、日本語の文章は非直線的で結論が分かりづらいとされるが、そうした特徴はどのような形で日本語の文章に現れているのだろうか。今回は日本語の文章が英訳される際、文の配列が変更されることに着目し、日本語の文章の特徴を捉えることを試みた。

II. 調査資料について

朝日新聞のコラム「天声人語」とその英訳を対照し、文順の改変のされ方を調べた。資料は、朝日新聞論説委員編(1991) (株)英文朝日訳『天声人語 '90冬の号』(原書房)を使用した。参照したのは、1990年10月から11月のうち、英訳のある「天声人語」33例である。全てその英訳が原文の内容を大幅に改めたり、削除したりしていないものである。

朝日新聞によると「天声人語」の英訳は殆ど逐語訳で、日本文と英文は文同士で対応するものが大半だが、英文として自然になることを条件に文順や段落の変更を認め、各翻訳家に依頼しているという。翻訳家はいずれもネイティブかそれに近いベテランで、複数の翻訳家が交代で翻訳を行っている。日本語の原文の方は原則として同一人物が継続して執筆にあたっている。

このような文章を扱うには著者の文体上の個性や、翻訳者のセンスについて考慮する必要があることは言うまでもない。しかし日本文で実際に行われている文順が、翻訳で改められ、そこにある種の特徴が見られるならば、それは文章の筋立てが日英で違うことの現れだと言えるのではないだろうか。このような考えから、今回はまず簡便な方法での対照比較を行い、文順について考える手掛かりを得ることにしたいと考えた。

III. 考察

「天声人語」33例を参照したうち、英訳の文の表出順序が日本文と異なる箇

所が、21例あった。中でも次のような箇所文順の変更が現れた。

- ・文章の冒頭部分
- ・日本語で、具体例の先行した箇所
- ・日本語で、隣合った文同士のつながりが分かりづらい箇所

特に文章の冒頭部での変更は、8例みられ、日本語と英文では文章の説き起こし方に、大きな違いがあることを予想させる。以下、文順の変更とそれに関わる特徴的な例を示す。なお例文を示す際、便宜上日本語の文頭に①②…等番号を振り、それに対応する英文にもそれぞれ番号を付した。

1) 具体の先行

日本語では話題となる事項の説明や、内容の予告より先に、個別的なエピソードや具体的な例をまず提示する事が少なくない。しかし英文に訳出される際には、これから語られる内容の説明や、話題の提示が先になるように、文順の変更が行われている。

①微妙なもので、箸の重さは地域によって違う、という。②関西では軽い箸を好み、東の方は重い箸を使う。…（中略）… ③工業デザイナー、秋岡芳夫さんの研究だ。

③According to industrial designer Yosio Akioka, ①chopsticks used in different regions vary in weight. ②Light chopsticks prevail in the Kansai area, while those used in eastern parts of the country are heavy. …（後略） [10.20 第一段落]

これは秋岡氏の研究を紹介し、手作りの良さを見直すという主旨の文章の、冒頭部である。日本語は、まず研究の具体的な例から説き起こしている。文章の主要な内容ではなくても、冒頭で唐突に具体的な事項を述べるのは、読者の興味を引くために修辭的な効果を狙ったものと考えられる。ところが、英訳は日本語の③にあたる文を、冒頭に置いている。この文章のトピックである秋岡氏の名前を最初に提示しているのである。

次の文章にも同じようなことが見られる。車椅子で世界走破したカナダ人男性の話を書いた文章の、冒頭部である。

①日本を訪問中のリック・ハンセンさんに会った。②以前、車いすで世界三十四カ国 延べ四万キロ以上を走破したカナダ人だ。

③会ってみたいと思っていた。常人の及ばぬ体力と気力の持ち主に違いない。

②Rick Hansen, the Canadian who traveled more than 40,000 kilometers through 34 countries in a wheelchair some years ago, is here.
①I have met him. ③The news of his feat made me anxious to see him because I thought the exploit was possible only for a person with extraordinary physical strength and willpower.

[11.2 第一段落]

リック・ハンセンという名前は有名人のものではないが、「日本を訪問中のリック・ハンセンに会った」、と唐突に述べることで、読者の興味を引いている。一方英訳では、リック・ハンセンが何者なのか、まず説明した後で、“I have met him.”と事実を述べる。日本文で具体的事実が先行し話題の予告や提示、説明を後回しにしている部分は、英訳の際、その順序が改められる事が分かる。このような変更例は他にも2例あった。

日本文で、一般的な事に関するコメントや、話題となる事柄の説明より、具体的エピソードや事件を先に述べるといったことは、「」の挿入の仕方を見るとよく分かる。「」（英語の場合は“ ”）で引用されるような言葉を、説明や断り書き無しでいきなり提示することは、日本文では珍しくない。しかし英文ではそういったことを避ける、という傾向があるようだ。

「パパの国、道が広いのね。緑がいっぱい。水牛がぶらぶらしてる。高層ビルが一つもない」「そうなんだ。お父さんの国、本当に貧しいんだからこれから精いっぱい開発しないとね」。これが入国初日の父娘の会話だった。

The first day they were there, the conversation with his daughter went like this: “The streets in your country are wide, aren’t they, Dad? There’s so much green! Water buffalo are standing around. Not a high-rise building in sight.” “That’s right. My country is very poor. They’d better start developing as fast as they can, hadn’t they?”

[11.26 第二段落]

大学でタイ語などを教える助教授が、学生達と娘を連れて母国のラオスへ行った、という冒頭を受けた、第二段落である。「これが入国初日の父娘の会話だった。」という一文が会話に先行しなくても、パパ、Dad という語から、会話が父と娘のものだということは分かる。文章の理解にはさして影響はない。しかし英訳では____部の会話の説明が、会話の前におかれている。このような文順の変更は他にも8例あった。

また、説明を先に持ってこないまでも、英文の場合、引用がある程度長くな

る時に、途中でそれが誰による何のための発言・文書なのか、説明を挟むことが多いのは周知のとおりだ。今回調べた中にも、日本文では、ある手紙の内容が一続きに述べられ、その後で説明が加わっている部分が、英訳では手紙の内容の途中に、説明が割って入る形になる、という例があった。

2) 三文以上にまたがる内容

隣あった文同士の内容のつながりが一見分かりづらい場合、英訳される際に原文の文順が変更される、という例が見られた。

①ここ一ヵ月半ほどの新聞を、まとめてゆっくり読んでみた。②やがて国会で国連平和協力法案の審議がはじまる。③その前に、協力隊の構想がどう練られてきたか、復習しておこう、というつもりだ。

②The Diet begins its consideration of the bill to establish the "U.N. Peace Cooperation Corps." ③ Before all this begins I wanted to look back to see how the notion came to be formed. ① With this in mind I read back carefully through the newspapers of the past month and a half. [10.11 第一段落]

上に挙げたのは、国連協力法案構想についての流れをたどり、首相の発言の一貫性の無さを指摘する、という内容の文章の冒頭である。

日本文では、①と②の文は意味の上で関連性がないが③の文を見て初めてそれが分かる。1) の例と同様に、ここでも文章の要旨とは直接関係ない一文で始まっていると言える。それに対して英訳の方は、話題を示す文を冒頭に置いている。また、①にあたる文を段落の最後に置くことにより、日本文のような複雑な文順ではなく、文の順序を追って内容が理解されるように改められているのである。

このように、日本語では隣あった文と文との意味上のつながりが明らかでなくても、三文以上で読み取れるような文章が書かれる。しかし英訳されるときには、文同士の意味的な隔たりが無くなるように、文順が改められる、ということが観察されるのである。

3) 文脈への依存

最後に、日本文では文脈に依存し、はっきりと述べられないことが、英訳では明示される、ということについて触れたい。ここで挙げた例文は、文順の変更ではなく、原文になかった文が挿入されている、という例である。これは黒

潮の迷惑な贈り物についての文章の冒頭で、以下、黒潮によってもたらされてきた様々なものについて述べていく、というものである。

日本列島の沿岸を北上して流れる黒潮は巨大なベルトコンベアーだ。たくさんの贈り物を運んできてくれる。先日は、長崎県五島の小さな町にイルカの大群をもたらした。気の毒なことだが、六百頭近くも浜辺に漂着して息絶えた。

The Black Current, the northerly flow of the sea along the coast of Japan, may be likened to a huge conveyor belt. It brings many gifts. But nowadays one cannot always be happy about what the stream brings. It was a pity, for example, that the other day, nearly 600 dolphins were cast up on the sand beach and died in a small town on one of the Goto Islands in Nagasaki Prefecture.

[11.9 第一段落]

日本文の方は、「たくさんの贈り物」の一例としてイルカの例を挙げ、「気の毒なことだが」という言葉で、その結果が喜ばしいものではなかったことを示している。しかし英訳の下線部は原文にない。Butで始まる下線部は、最初に述べられた「贈り物」という観点を明らかに否定するものであり、それに続く具体例が、どのような性質のものか予想できるようにしている。英文は事実から感じられることや事柄の性質をBut...の文で明示しているのである。「気の毒なことだが」という言葉に、喜ばしいはずの「贈り物」と逆の事実を読み取ることになる日本文とは対照的である。

英文では、筆者が事実から何を感じたかを文章に明示する。しかし、日本文はそれを明示すること無しに読者に読み取らせることに抵抗が少ない、ということも考えられる。

IV. まとめと今後の課題

以上の結果をまとめる。

- ・文章の中心的な話題や主題が何なのか、日本文では文脈でそれを把握させたり、読者の興味を引きつけるために後回しにしているところが、英文では最初に明示するように改められている。
- ・日本文で具体的事象を先に示し、後から一般的・総括的な説明を加えるような文順は、英訳で改められる。特に「」や“ ”による、会話などの引用文の挿入の仕方に違いがある。
- ・日本文では、文同士のつながりが不明瞭であったり、途切れたりすること

があっても、段落などの文章単位で、文同士の関係は自ずと理解されるようになっており、筆者の意図を文章全体から読み取ることは可能である。英文の場合は、文同士の内容から見た関係が明らかになるように、接続詞等を使い文章における論理展開をはっきりさせる。

「天声人語」は、独特の文体からなった特殊な性質の文章である。しかしまた同時に、大変多くの日本人が慣れ親しんでいる文章であり、学校の教材に使われることで知られているのも事実である。こうしたことから、今回の調査結果から「効果的・好ましい・自然」とされる文章の筋立てや表現のスタイルが、日英両語で異なると判断される。更に、こうした文順の変更の必然性について、英語話者に意見を求めることも必要である。また日本語的な文順でありながら、そのまま英文に訳された例がどの位あるのかも、把握すべき点であろう。今後の課題としたい。

日本人が期待する、あるいは許容する文章の運びを、別の言語では不自然なものとして捉えることがあるとすれば、学習者の読解や作文に影響を与えると考えられる。これらのことも今後、文章・談話レベルに注目した研究により明らかにしていきたいところである。

〔参考文献〕

- Condon, J. C. (1980) 近藤千恵訳『異文化間コミュニケーション—カルチャーギャップの理解』（サイマル出版会）
- Kaplan, R. B. (1966) 'CULTURAL THOUGHT PATTERNS IN INTER-CULTURAL EDUCATION' Language Learning 16
- 牧野成一(1978) 『ことばと空間』（東海大出版）
- 成瀬武史(1978) 『翻訳の諸相—理論と実際』（開文社出版）
- 西原鈴子(1990) 「日英対照修辞法」『日本語教育』72号
- 外山滋比古(1973) 「外国語の学習と思考」『日本語の論理』（中央公論社）
- 外山滋比古(1981) 『日本語の素顔』（中央公論社）

（お茶の水女子大学日本言語文化専攻修士2年）